

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

空海 KU-KAI 美しき王妃の謎 (妖猫伝 / Legend of the Demon Cat)

2017年/中国、日本映画
配給：東宝、KADOKAWA/132分

2018 (平成30) 年1月26日鑑賞 東宝試写室

Data

監督：陳凱歌 (チェン・カイコー)
原作：夢枕獏『沙門空海 唐の国にて鬼と宴す』(全4巻)(角川文庫/徳間文庫刊)
出演：染谷将太 / 黄軒 (ホアン・シユアン) / 張榕容 (チャン・ロンロン) / 火野正平 / 松坂慶子 / 阿部寛 / 張魯一 (チャン・ルーイー) / 劉昊然 (リウ・ハオラン) / 歐豪 (オウ・ハオ) / 田雨 (ティアン・ユー)

👁️👁️ みどころ

張藝謀 (チャン・イーモウ) 監督と並ぶ「中国第五世代」の代表、陳凱歌 (チェン・カイコー) 監督が、日本人なら誰でも知っている「空海」をタイトルにした制作費150億円という「日中合作モノ」に挑戦！それだけで期待大だが、原作が夢枕獏の『沙門空海 唐の国にて鬼と宴す』だというのが、私には少し気がかり・・・？

長安の都のセットはすごい。嵐に巻き込まれる遣唐船も原寸大でつくられたらしい。ところが、本作では冒頭に登場する黒猫 (妖猫) がストーリーを牽引するうえ、「宮廷の宴」ではワイヤーアクションが満載だから、少しマンガ的に……。さらに、玄宗皇帝と楊貴妃との愛の物語と、楊貴妃の死の謎を空海と白居易 (=白楽天) が解いていくというミステリー仕立ての本作では、空海と阿倍仲麻呂、李白と白居易との時代上の接点があいまいだから、わかりにくい……？

私の目にはそんな難点(?)が見えるが、「エンタメ追及」の今の時代はこれでいいのかも…。さて、あなたの賛否は？ご意見は？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■陳凱歌監督の新作に期待大！■□■

1952年生まれ陳凱歌 (チェン・カイコー) 監督は、張藝謀 (チャン・イーモウ) 監督と並ぶ中国第五世代を代表する大監督。デビュー作の『黄色い大地』(84年)、『シネマルーム4』12頁、『シネマルーム5』63頁参照) が世界に与えた衝撃は大きかったし、その後の『さらば、わが愛/霸王別姫』(93年)、『シネマルーム2』21頁、『シネマル

ーム5』107頁参照)、『始皇帝暗殺 (The First Emperor)』(98年) (『シネマルーム5』127頁参照)、さらには『北京ヴァイオリン』(02年) (『シネマルーム3』18頁、『シネマルーム5』299頁参照) 等、素晴らしい作品が続いた。また、近時の『花の生涯～梅蘭芳～ (梅蘭芳/Forever Enthralled)』(08年) (『シネマルーム22』223頁、『シネマルーム34』117頁参照)、『運命の子 (趙氏孤児/Sacrifice)』(10年) (『シネマルーム28』155頁、『シネマルーム34』43頁参照) 等の出来も素晴らしかった。

そんな陳凱歌監督が、制作費150億円をかけた日中合作大作として日本人にも有名な「空海」の物語に挑戦！それを聞くだけで期待大だが、その原作は夢枕獏の『沙門空海 唐の国にて鬼と宴す』(全4巻) とのこと。これは「壮大なる中国伝奇小説全4巻」だそうだが、なぜ、そんな「伝奇小説」を原作としたの？日中友好が進み、日中合作映画が作られる方向性は大きい結構だが、陳凱歌監督と夢枕獏との接点はどこにあるの？そして、その相互理解は如何に？

■□■陳凱歌監督と夢枕獏の原作の組み合わせは？■□■

私は陳凱歌監督はよく知っているが、夢枕獏の小説は1冊も読んでいない。したがって、全4巻から成る原作も読んでいないが、私にはそもそも「伝奇小説」というジャンルそのものにひっかかりがある。また、本作はかなり以前から前評判がすごかったが、その物語は密教の教えを求めて、日本から遣唐使として唐の国に渡った若き修行僧・空海 (染谷将太) が、若き詩人白楽天 (=白居易) (黄軒 (ホアン・シュアン)) と共に長安の都を脅かす怪事件の謎を追うものだと聞いただけに、そのマンガ性も少し心配になる。さらに、本作のチラシを読み、予告編を観ると、ワイヤーロープ・アクションが満載らしいので、そのマンガ性もますます心配に。

他方、近時公開されたアガサ・クリスティ原作の『オリエント急行殺人事件』(17年) のような本格的ミステリーではそれなりの面白さが約束されているが、「空海」はあくまで修行僧であって探偵ではない。白楽天だって、後に玄宗皇帝と楊貴妃との深愛の詩『長恨歌』を詠んだことで有名になったが、探偵としての能力は如何に・・・？そんなこんなを考えると、本作の内容 (出来) に少し不安を持ったまま、試写室へ行くことに・・・。

■□■長安のセットはもちろん、遣唐船もホンモノ？■□■

私は2001年に西安・敦煌旅行に行き、西安の町を見学した。しかし、それはあくまで現代の西安であって、8世紀当時の世界的大都市だった「長安」の都の規模とは全然違うもの。また、空海が命をかけて海を渡った長安にある青龍寺にも行ったが、その規模もあの時代と今とは全然違うらしい。さらに、敦煌では、西田敏行が主演した映画『敦煌』(87年) の舞台となった巨大なセットを見学し、大いに感動したものだ。そんな西安・敦煌旅行を体験した私は、本作のスクリーン上に広がる唐代の長安の姿や青龍寺の姿にビ

ックリ！その巨大なセットの制作費はHow much・・・？

他方、人類の進歩とともに造船の技術も進み、1911年には「タイタニック号」が進水するに至ったが、それに比べれば8世紀の遣唐船なんてちよろいもの。いわば、一寸法師が乗ったという「お椀の舟」のようなレベルだが、いざそれを撮影のために原寸大で実際に作るとなると、その費用はHow much・・・？

今や中国映画の話題作の製作費はハリウッドを凌いでいるが、本作では総製作費150億円、空前絶後

の超大作プロジェクトによる巨大セットに注目！もともと、夢枕獏の原作らしく本作のストーリー形成のキーになるのは、CG合成によって作られた黒猫だから、その「目の光らせ方」にも注目！



『空海 KU-KAI 美しき王妃の謎 (妖猫伝/Legend of the Demon Cat)』
画・王雅 (2018. 5)

■□■楊貴妃の死の謎とは？空海の推理は如何に？■□■

唐は8世紀前後には世界最大の国になっていたが、その時の皇帝が日本でも楊貴妃(チャン・ロンロン)との愛の物語で有名な玄宗皇帝(チャン・ルーイー)。そして、その2人の愛を「長恨歌」という詩で詠んだのが白樂天(=白居易)だ。「長恨歌」を読めば、玄宗皇帝は本来、息子の嫁になるべきはずの楊貴妃の美しさに惹かれ、いわば息子から横取りしたわけだから、その愛(色好み?)は突出していたことがよくわかる。私も見学した「華清池」は玄宗皇帝と楊貴妃が2人で過ごした避暑地だが、楊貴妃との愛におぼれた玄宗皇帝はそこにこもって(?)政治をおろそかにしてしまったため、安祿山(ワン・デイ)から「安史の乱」を起こされ、楊貴妃は殺されてしまった。それが歴史上の事実だ。

しかし、本作は全編を通じてストーリーの核となる妖猫の活躍が大きなウエイトを占めるうえ、玄宗皇帝が夜毎(?)宮廷で繰り広げる華やかな宴の中には、玄宗皇帝に仕える長安一の実力を持つ幻術師、黄鶴(リウ・ペイチー)や、その弟子である白龍(リウ・ハ

オラン) と丹龍 (オウ・ハオ) 等が登場し、華やかな幻術合戦をワイヤーロープで魅せてくれる。

さらに、妖猫の魔術にとりつかれるキーウーマンが都の官吏である陳雲樵 (チン・ハオ) の妻、春琴 (キティ・チャン) や、陳雲樵のお気に入りの妓生である麗香 (シャー・ナン)。そこに、陳雲樵が目かける美しき胡玉楼の新人妓生の玉蓮 (チャン・ティエンアイ) も絡んで、玄宗皇帝の周りは大きな混乱に陥っていく。玄宗皇帝の命令により、唐を代表する詩人、李白 (シン・バイチン) は「雲には衣装を想い、花には容を想う」と詠んだが、この李白もかなりの変わりモノ。しかして、陳凱歌監督×夢枕獯原作による本作のストーリーは、何とも意外な展開になっていくことに・・・。

張藝謀 (チャン・イーモウ) 監督の『HIRO (英雄)』(02年) はすばらしい色彩美の映画だったし、そこでのワイヤーアクションも面白かった (『シネマルーム5』134頁参照) が、陳凱歌監督が『PROMISE (無極)』(05年) で見せたワイヤーロープはイマイチだった (『シネマルーム17』102頁参照)。しかして、楊貴妃の死の謎をめぐる展開する本作のワイヤーロープは如何に? そしてまた、アガサ・クリスティの『オリエンタル急行事件』ばりの推理を進めていく修行僧、空海 (染谷将太) とその相棒、白居易の推理は如何に・・・?

■□名前を知っても人物像の特定は?どこまでがホント?■□

日本人なら誰でも空海も阿倍仲麻呂 (阿部寛) の名前を知っているし、玄宗皇帝と楊貴妃の名前も知っている。また、少し学のある人なら、唐の詩人である李白と白樂天 (=白居易) の名前も知っている。しかし、空海や阿倍仲麻呂の「実績」はほとんど知らないし、これらの人物の相互関係もほとんど知らない。ましてや、本作に登場する上記以外の人物の名前は全然知らないだろう。

しかして、本作冒頭に登場するのは、何と阿倍仲麻呂の側室、白玲 (松坂慶子)。この冒頭のシークエンスに謎の妖猫が登場することによって阿倍仲麻呂が一躍大金持ちになり、玄宗皇帝に仕える身でありながら何と楊貴妃に思いを寄せていくストーリーの骨格ができあがっていくから、アレレ・・・。松坂慶子は『蒲田行進曲』(82年) の熱演を始めとして私の大好きな女優だが、1952年生まれという年齢からして、いくら何でも1964年生まれの阿部寛の「側室」という役柄は如何なもの・・・? もちろん、撮影上のテクニクによってそれなりの若さと美しさはキープしているから、松坂慶子を知らない中国人はごまかせるだろうが、ほぼ彼女と同世代の私の目には、やはりこのキャスティングは如何なもの・・・。

他方、阿部寛も近時みた、『祈りの幕が下りる時』(18年) で面白いキャラを演じていたし、基本的にはどんな役でもうまく演じるオールラウンド型の俳優だが、本作では彼のモノローグが目立っている。白居易と共に楊貴妃の死の謎に挑むことになった空海にとつ

ては、先輩の遣唐留学生だった阿倍仲麻呂（中国名、晁衡）が、その時期にいかなる動きをしたかは大きなヒントになったはず。したがって、本作では阿倍仲麻呂のモノローグが空海の推理の進展上大きな役割を果たすことになるが、観客席からそのストーリーを見てみると、いかにもそれがつくりものっぽく見えてくる。小説も映画もつくり方は自由だが、そうかといって史実を無視していくらでも空想を重ねていくと、読者や観客はワケがわからなくなってくるのでは・・・？

もっとも、それが「伝奇小説」の特権なのかもしれないから、陳凱歌監督はそれを徹底させているが、そうすると後は、それが好きか嫌いかの問題になってくる。そして私には、名前を知っている数名の有名人について、その歴史上果たした役割と本作で果たしている役割のギャップにいささか違和感が・・・。

■□■空海の本来の人物像は？タイトルに偽りあり？■□■

「白紙（894年）に戻す遣唐使」。大学受験で日本史を勉強している時、私たちはそう覚え（させられ）たし、遣唐船に乗って中国に渡った修行僧も空海の他、最澄等がいたことも覚え（させられ）た。そして、空海は高野山に金剛峰寺を、最澄は比叡山に延暦寺をそれぞれ開いたことも覚え（させられ）たものだ。しかし、それらはあくまで暗記のための勉強であって、自分から歴史を学び、その歴史の中に生きた人物像やその歩みに興味をもった勉強ではなかった。そんな興味は受験勉強の中ではなく、小説や映画から学んだわけだ。しかして、夢枕獏の原作を読んだら、ホントに空海の勉強になるの？また、陳凱歌監督の本作を鑑賞したら、ホントに空海の勉強になるの？そう考えると、いささか心もとない気になるのは私だけだろうか。

ちなみに、本作のプレスシートには「空海の歩み」があり、774年の生誕から921年の死亡に至るまでの彼が果たした役割の年表がある。また、その下には「空海伝説」として、12の伝説がのっている。私は空海についてはむしろこちらの方に興味があるのだが、本作は彼が片手間に働いた探偵という役割に焦点をあてたもの。したがって、空海が修行僧として唐の国で何を学び、何を果たしたのか、それを日本に持ち帰って如何に活用したのか、という空海本来の役割については何も描かれていない。それはそれで選択の問題だが、本作をそういう内容にするのなら、本作のタイトルを「空海」ではなく、原作の「沙門空海 唐の国にて鬼と宴す」のようなものにすべきだったのでは・・・？

陳凱歌監督の初期の作品である『さらば、わが愛／霸王別姫』（93年）や『始皇帝暗殺』（98年）はもとより、その後の『北京ヴァイオリン』（02年）も『花の生涯～梅蘭芳～』（08年）も『運命の子』（10年）もすべてタイトルとその内容が一致していたが、本作だけは『空海』というタイトルとその内容が一致していないのでは・・・？

2017（平成29）年2月7日記